

宝の海から

白浜で出会ったスジユムシのたから

43

京都大学助教授 久保田 信 (京都大学 瀬戸臨海実験所)

台風10号接近中の7月30日、北浜でシユノーケリング観察をしていたところ、干潮時水深1メートルほどの海底にある石の下から、ころりと出てきたのは、すべりとした体つき、ユムシだった。北浜ではあまり見かけない動物である。

先に短いひものような吻(くちか)がついている。体は多少収縮し、吻を除いた体長が7センチほどだった。この吻から粘液を出して海底の有機物をかきめとって食べているおとなしい動物である。そのため、海底にきれいな幾何学模様を描くこともある「芸術家」だ。

スジユムシ田辺湾で日本北限

以前、スジユムシという珍しいユムシを番所崎や塔島の磯で採取したことがある。1993年7月22日が第一発見日、年3月19日、番所崎の潮間帯で異常に膨れたヨロで、塔島の岩礁性潮間帯

の臼っぽい筋として伸びていたものの脳のようなふくらみはどこにもなかった。発見で分布の日本北限が一気に田辺湾まで伸びたことになる。

2004年7月30日に北浜で転石の下に潜んでいたユムシの一種。吻が切れた状態。



ユムシの一種を解剖したもので、体内のほとんどを占める消化管をどけると、腹側にある1本の神経が見えるが右側の先端に脳のふくらみがない



田辺湾が日本の分布北限であるスジユムシ (1993年7月22日塔島で採集)

ユムシがころがり出てきた。この赤い液はスジユムシ体内に含まれている体液(たいこうえき)に違いない。インキンチャクの強力な消化液で、スジユムシはあわれにも体を溶かされかけていたのだ。その時の全長は2.5センチほどだった。その後、番所崎で2個体が94年3月と95年6月に番所崎でそれぞれ1個体、95年3月には申本町で1個体が発見された。これらの標本は、ユムシ類に詳しい名古屋大学の西川博昭博士が解剖して内部形態も精査し、種を確定された。そして、西川博士とともに、発見状況なども踏まえて南紀生

ユムシがころがり出てきた。当時、スジユムシを瀬戸臨海実験所水族館で飼育展示を始めた。ところが、水槽から脱走して姿をくらました苦い経験となった。今回のユムシの一種といい、スジユムシ類は脱走がうまい。柔軟な体は、岩や石の下にあらずかなすき間でもならなく潜り込めるのだらう。

一般にユムシ類は海底に穴を掘って二つの開口をつくりU字状の水の流れのよい巣に住んでいることが多い。スジユムシも同様で、シンガポールや香港では、砂浜の海底にこうした巣をつくって暮らしているとのことである。ユムシ類はなじみのない動物に思われがちだが、釣り人の間では釣り餌として知っている人も多い。また、韓国や中国では食用となっているとの情報を、最近、複数の知人から得た。韓国・釜山ではコチュジャン(唐辛子みそ)を付けて食べるとコリコリしていて結構おいしいと聞いた。

このほか、ユムシ類には変わった仲間がいくつも居る。その一つは日本産のサナダユムシだ。体長が40センチほどになるユムシ類中最大の種類で、吻の長さは150センチに達する。かつて底引き採集で吻の一部だけが捕獲されたところである。地球温暖化が進んでいるが、その後、スジユムシは田辺湾周辺からは発見されていない。

ユムシ類は日本にわずか20種ほどしかいない。世界でも150種ほど知られているだけだ。すべて海産で、雌雄異体ではない。

ユムシ類は非常に小さい。いわばチョウチンアンコウの雄のような雌への寄生者だ。雄は単なる精巣になりきっているのだ。

このほか、ユムシ類には変わった仲間がいくつも居る。その一つは日本産のサナダユムシだ。体長が40センチほどになるユムシ類中最大の種類で、吻の長さは150センチに達する。かつて底引き採集で吻の一部だけが捕獲されたところである。地球温暖化が進んでいるが、その後、スジユムシは田辺湾周辺からは発見されていない。

ユムシ類は日本にわずか20種ほどしかいない。世界でも150種ほど知られているだけだ。すべて海産で、雌雄異体ではない。